

女難

国木田独歩

青空文庫

今より四年前のことである、（とある男が話しだした）自分は何かの用事で銀座を歩いていると、ある四辻よつ辻の隅すみに一人の男が尺八を吹いているのを見た。七八人の人がその前に立っているので、自分もふと足を止めて聴きく人の仲間に加わった。

ころは春五月の末で、日は西に傾いて西側の家並みの影が東側の家の礎いしずえから二三尺も上に這はい上っていた。それで尺八を吹く男の腰から上は鮮あざやかな夕陽ゆうひに照あらされていたのである。

夕暮近いので、街はひとしおの雑踏を極め、鉄道馬車の往来、

くるま
人車の東西に駈^かけぬける車輪の音、途^{みち}を急ぐ人足の響きなど、あ
たりは騒然紛然としていた。この騒がしい場所の騒がしい時にか
の男は悠^{ゆうぜん}然と尺八を吹いていたのである。それであるから、自
分の目には彼が半身に浴びている春の夕陽までがいかにも静かに、
穏やかに見えて、彼の尺八の音の達^{とど}く限り、そこに悠々たる一寰^か
区^{んく}が作られているように思われたのである。

自分は彼が吹き出づる一高一低、絶えんとして絶えざる哀調を
聴きながらも、つらつら彼の姿を看^みた。

彼は盲^{めくら}人である。年ごろは三十二三でもあろうか、日に焼けて
黒いのと、垢^{あか}に埋^{うず}もれて汚ないので年もしかとは判じかねるほ
どであった。ただ汚ないばかりでなく、見るからして彼ははなは

だやつれていた、思うに昼は街の塵に吹き立てられ、夜は木賃宿の隅に垢じみた夜具を被るのであろう。容貌は長い方で、鼻も高く眉毛も濃く、額は櫛を加えたこともない蓬々とした髪で半ばおおわれているが、見たところほどよく発達し、よく下品な人に見るような骨張ったむげに凸起した額ではない。

音の力は恐ろしいもので、どんな下等な男女が弾吹しても、聴く方から思うと、なんとなく弾吹者その人までをゆかしく感ずるものである。ことにこの盲人はそのむさくるしい姿に反映してどことなく人品の高いところがあるので、なおさら自分の心を動かした、恐らく聴いている他の人々も同感であつたろうと思う。その吹き出づる哀樂の曲は彼が運命拙なき身の上の旧歡今悲を語

るがごとくに人々は感じたであろう。聴き捨てにする人は少なく、一銭二銭を彼の手握らして立ち去るが多かつた。

二

同じ年の夏である。自分は家族を連れて鎌倉に暑さを避け、山に近き一小屋こいえを借りて住んでいた。ある夜のこと、月影ことに冴さえていたので独り散歩して浜に出た。

浜は昼間の賑にぎわいに引きかえて、月の景色の妙たえなるにもかかわらず人出少し。自分は小川の海に注ぐ汀みぎわに立って波に砕しろがくる白銀ねの光を眺めていると、どこからともなく尺八の音が微かすかに聞

えたので、あたりを見廻わすと、笛の音は西の方、ほど近いところ、漁船の多く曳き上げてあるあたりから起るのである。

近づいて見ると、はたして一艘の小舟の水際より四五間も曳き上げてあるをその周囲を取り巻いて、ある者は舷に腰かけ、ある者は砂上にうずくまり、ある者は立ちなど、十人あまりの男女が集まっている、そのうちに一人の男が舷に倚つて尺八を吹いているのである。

自分は、人々の群よりは、離れて聴いていた。月影はこんもりとこの一群を映している、人々は一語を発しないで耳を傾けていた。今しも一曲が終わったらしい、聴者の三四人は立ち去った。余の人々は次の曲を待っているけれど吹く男は尺八を膝に突

き首かしらを垂たれたまま身動きもしないのである。かくしてまた四五分も経たつた。他の三四人がまた立ち去いつた。自分は小船せうせんに近づいた。

見ると残のこっている聴者きしやの三人は浜の童の一人、村の若者わかしやの二人のみ、自分は舷へんに近く笛吹く男の前に立つた。男は頭かしらを上げた。

思いきや彼はこの春、銀座街頭に見たるその盲人めくらならず、されど盲人なる彼れの盲目めくらならずとも自分を見知るべくもあらず、しばらく自分の方を向むいていたが、やがてまた吹き初はじめた。指端したんを弄あそびして低き音の縷いとのごときを引くことしばし、突然中止して船端なばたより下くだりた。自分はいきなり、

「あんまさん、私の宅うちに来て、少し聞かしてくれんか」

「ハイ、ハイ」と彼は驚いたように言いつて急に自分の顔を見て、

そしてまた頭を垂れ首を傾け「へい、どちら様へでも参ります」

「ウン、それじゃ来ておくれ」と自分は先に立った。

「お前の眼は全く見えないのかね」と四五歩にして振り返りさま自分は問うた。

「イイエ、右の方は少し見えるのでございます」

「少しでも見えれば結構だね」

「へエ、へへへへ」と彼は軽く笑ったが「イヤなまじすこしばかり見えるのもよくございませぬ、欲が出ましてな」

「オイ橋だぞ」と溝みぞにかけし小橋に注意して「けれども全く見えなくちやアこんなところまで来て稼かせぐわけにゆかんではないか」

「稼ぐのならようございませぬが流がすので……」

「お前どこだい、生まれは」

「生まれは西でございます、へい」

「私はお前をこの春、銀座で見たことがある、どういふものかその時から時々お前のことを思いだすのだ、だから今もお前の顔を一目見てすぐ知った」

「へいそうでございますか、イヤもう行き当りばったりで足の向き次第、国々を流して歩くのでございますからどこでどなた様に逢あいますことやら……」

途みちで二三の年若い男女に出遇であった。軽雲一片月をかざしたのであたりはおぼろになった。手風琴の軽い調子が高い窓から響く。間もなく自分の宅うちに着いた。

縁^{えん}辺^{がわ}に席を与えて、まず麦湯一杯、それから一曲を所望した。

自分は尺八のことにはまるで素人であるから、彼が吹くその曲の善^よし悪^あし、彼の技の巧拙はわからないけれども、心をこめて吹くその音色の脈々としてわれに迫る時、われ知らず凄^{せい}動^{どう}したのである。泣かんか、泣くにはあまりに悲^{かな}哀^{しみ}深し、吹く彼れはそもそもの感^{かん}ずることなきか。

曲終れば、音を売るものの常として必ず笑み、必ず謙遜の言葉の二三を吐くなるに反して、彼は默然として控え、今しもわが吹

き終つた音の虚空に消えゆく、消えゆきし、そのあとを逐おうかと思わるるばかりであつた。

自分は彼の言葉つき、その態度により、初めよりその身の上に潜める物語りのあるべきを想像していたから、遠慮なく切りだし
た。

「尺八は本式に稽古けいこしたのでらうか、失敬なことを聞くが」

「イイエそうではないのでございます、全く自己流で、ただ子供の時から好きで吹き慣らしたというばかりで、人様にお聞かせ申すものではないのでございます、へい」

「イヤそうでない、全くうまいものだ、これほど技があるなら人の門かどを流して歩かないでも弟子でも取つた方が楽だろと思う、

お前ひとりもの独身者かね？」

「ヘイ、親もなければ妻子もない、気楽なひとりもの孤独者でございます、
ヘッヘヘヘヘヘ」

「イヤ気楽でもあるまい、日に焼け雨に打たれ、住むところも定
まらず国々を流れゆくなどはあまり気楽でもなからうじやアない
か。けれどもいずれ何か理由いわれのあることだろうと思う、身の上話
を一ツ聞かしてもらいたいものだ」と思いきつて正面から問いか
けた。人の不幸や、零落につけこんで、その秘密まで聞こうとす
るのは、決して心あるものすることでないとは承知しながらも、
彼に二度まで遇い、その遇うた場所と趣とが少からず自分を動か
したために、それらを顧慮することができなかつたのである。

「へい、お話ししてもよろしゅうございます。今日はどういふものかしきりと子供の時のことを思い出して、さきほども別荘の坊ちやまたちがお庭の中で声を揃そろえて唱歌を歌つておいでになるのを聞いた時なんだか泣きたくなりました。

私の九つ十のころでここのとおございます、よく母に連れられて城下から三里奥の山里に住んでいる叔母の家を訪ねて、二晩三晩泊つたものでございます。今日もちょうどそのころのことを久しぶりで思い出しました。今思うと、私が十七八の時分ひとが尺八を吹くのを聞いて、心をむしられるような気がしましたが、今私が九つや十の子供の時を想い出して堪たまらなくなるのとちょうど同じ心持でございます。

父には五つの歳に別れまして、母と祖母ばばとの手で育てられ、一反ばかりの広い屋敷に、山茶花さざんかもあり百日紅さるすべりもあり、黄金色の荔枝れいしの実が袖垣そでがきに下つていたのは今も眼の先にちらつきます。家と屋敷ばかり広うても貧乏士族で実は喰うにも困る中を母が手内職で、子供心にはなんの苦労もなく日を送つていたのでございます。

母も心細いので山家の里に時々帰るのが何よりの楽しみ、朝早く起きて、淋しい士族屋敷の杉垣ばかり並んだ中をとぼとぼと歩るきだす時の心持はなんとも言えませんでした。山路三里は子供には少し難儀で初めのうちこそ母よりも先に勇ましく飛んだり跳ねたり、田溝の鮒ふなに石を投げたりして参りますが峠なかにかかる半

ほどでへこたれてしまいました。それを母が励まして絶頂の茶屋に休んで峠餅とうげもちとか言いまして茶屋の婆が一人ぎめの名物を喰わしてもらうのを楽しみに、また一呼吸ひといきの勇氣を出しました。峠を越して半ほどなかまで来ると、すぐ下に叔母の村里が見えます、春さきは狭い谷々に霞かすみがたなびいて画のようでございました、村里が見えるともう到ついた気でその路傍みちばたの石で一休みしまして、母は煙草たばこを吸い、私は山の崖がけから落ちる清水を飲みました。

叔母の家は古い郷土で、そのころは大分家産が傾いていたようですが、それでも私の目には大変金持のように見えたのでございませす。太い大黒柱や、薄暗い米倉や、葛かつらの這い上った練堀ねりべいや、深い井戸が私には皆なありがたかったので、下男下女が私のこと

を城下の旦那様と言つてくれるのがうれしかったのでございます。けれども何より嬉しくつて今思ひだしても堪りませんのは同じ年ごろの従兄弟と二人で遊ぶことでした。二人はよく山の峡間の溪川に山を釣りに行つたものでございます。山岸の一方が淵になつて蒼々と湛え、こちらは浅く瀬になつていますから、私どもはその瀬に立つて糸を淵に投げ込んで釣るのでございます。見上げると両側の山は切り削いだように突つ立つて、それに雑木や赭松が暗く茂つていますから、下から瞻ると空は帯のようなのです。声を立てると山に響いて山が唸ります、黙つて釣つていと森としています。

ある日ふたりは余念なく釣つていますと、いつの間にか空が変

つて、さつと雨が降つて来ました。ところがその日はことによく釣れるので二人とも帰ろうと言わないのです。太い雨が竿さおに中あたる、水面は水煙を立てて雨が跳はねる、見あげると雨の足が山の絶頂から白い糸のように長く条白しまを立てて落ちるのです。衣服きものはびしょぬれになる、これは大変だと思ふ矢先に、グイグイと強く糸を引く、上げると尺にも近い山の紫と紅あかの条すじのあるのが釣れるのでございませう、暴あばれるやつをグイと握びくつて籠びくに押し込む時は、水に住む魚までがこの雨に濡れて他の時よりも一倍鮮やかで新しいように思われました。

『もう帰えろうか』と一人が言つて此方をちよつと向きますが、すぐまた水面を見ます。

『帰ろうか』と一人が答えますが、これは見向きもしません、實際何を自分で言ったのかまるで夢中なのでございます。

そのうちに雷がすぐ頭の上で鳴りだして、それが山に響いて山が破裂するかと思うような凄い音がして来たので、二人は物をも言わず糸を巻いて、籠びくを提さげるが早いかドンドン逃げだしました。途中まで来ると下男が迎えに来るのに逢あいました、家に帰ると叔母おばと母とに叱しかられて、籠を井戸ばたに投げ出したまま、衣服を着更えすぐ物置のような二階の一室ひとまに入り小さくなつて、源平盛衰記の古本を出して画を見たものです。

けれども母と叔母はさしむかいでいても決して笑い転ころげるようなことはありません、二人とも言葉の少ない、物案じ顔の、色つ

やの悪い女でしたが、何か優しい低い声でひそひそ話し合っていました。一度は母が泣き顔をしている傍そばで叔母が涙ぐんでいるのを見ましたが私は別に気にも留めず、ただちよつとこわいような気がしてすぐと茶の間を飛び出したことがありました。

私は七日も十日も泊っていたのでございますが、長くて四日も経ちますと母が帰ろうと言いますので仕方なしに帰るのでございます。一度は一人残っていると強情を張りましたので、母だけに先に戻りましたが、私は日の暮れかかりに縁先に立っていますと、叔母の家は山に拠つつて高く築きあげてありますから山里の暮れゆくのが見下されるのです。西の空は夕日の余光なごりが水のように冴さえて、山々は薄墨の色にぼけ、蒼あおい煙が谷や森の裾すそに浮いています、

なんだかうら悲しくなりました。寺の鐘までがいつもとは違うように聞え、その長く曳く音が谷々を渡つて遠く消えてゆくのを聞きましたら、急に母が恋しくなつて、なぜ一しよに帰らなかつたらう、今時分は家に着いて祖母おばアさんと何か話してござるだらうなと思ひますと堪らなくなつて叔母にこれからすぐ帰ると云いだしました。叔母は笑つて取り合つてくれませんが、そのうちに燈火あかりが点く、従兄弟と掬はさみ将しょうぎ碁をやるなどするうちにいつか紛れてしまいました。次の日は下男に送られすぐ家に帰りました。

また母と一しよに帰る時など、二人とも出かける時ほどの元氣はありませんで、峠を越す時、母は幾度となく休みます。思ひ出しますのはその時の母の顔でございます。石に腰をおろしてほつ

と呼吸を吐いて言うに言われん悲しげな顔つきをします、その顔つきを見ますと私までが子供心にも悲しいような気がしまして黙つてつくねんと母の傍そばに腰をかけているのでございます。そうすると母が、『お前腹がすきはせんか、腹がすいたら餅をお喰べ、出して上げようか』と言つて合財囊がつさいぶくろの口を開きかけます。私
が、『腹はすかない』と言えば、『そんなことを言わないで一つお喰べ、おつかさんも喰べるから』と言つて無理に餅をくれます。そうされますと、私はなぜかなお悲しくなつて、母の膝にしがみついて泣きたいほどに感じました。

私は今でも母が恋しくつて恋しくつて堪らんのでございます「盲人は懐旧の念に堪えずや、急に言葉を止めて頭を垂れていた

が、しばらくして（聴者ききての誰人たれなるかはすでに忘れはてたかのごとく熱心に）

「けれどもこれはあたりまえでございませぬ、母はまるで私のために生きていましたので、一人の私をただむやみと可愛がりました。めつたに叱つたこともありません、たまさか叱りましてもすぐに母の方から謝あやまるように私の気嫌を取りました。それで私は我わがま儘まな剛情者に育ちましたかと言うにそうではないので、腕白者のすることだけは一通りやりながら気が弱くて女のようなところがあつたのでございませぬ。

これが昔氣質の祖母おばの氣に入りませぬ、ややともすると母に向
いまして、

『お前があんまり優しくするから修蔵までが気の弱い児になつてしまふ。お前からしても少ししつかりして男は男らしく育てんといけませんぞ』とかく言つたものです。

けれども母の性うまれつき質としてどうしても男は男らしくというよはげうな烈しい育て方はできないのです。ただむやみと私が可愛いので、先から先と私の行く末を考へては、それを幸福しあわせの方には取らないで、不幸せなことばかりを想ひ、ひとしお私がふびんで堪らないのでございました。

ある時、母は私の行く末を心配するあまりに、善教寺という寺そばの傍に店を出していた怪しい売うらないしや卜者のところへ私を連れて参りました。

売卜者の顔はよく憶おぼえております、丸顔の眼の深く落ちこんだ小さな老人で、顔つきは薄気味悪うございましたが母と話をするその言葉つきは大変に優しくつて丁寧で、『アアさようかな、それは心配なことで、ごもつともごもつとも、よく私が卜みて進ぜます』という調子でございました。

老人は私の顔を天眼鏡で覗のぞいて見たり、筮ぜい竹ちくをがちやがちやいわして見たり、まるで人相見と八卦見はっけみと一しよにやっています、
たが、やがてのことに、

『イヤ御心配なさるな、この児さんは末はきつと出世なさるる、よほどよい人相だ。けれど一つの難がある、それは女難だ、一生涯女に気をつけてゆけばきつと立派なものになる』と私の頭を撫な

でまして、『むむ、いい児だ』としげしげ私の顔を見ました。

母は大喜びに喜びまして、家に帰えるやすぐと祖母にこのことを吹聴しましたところが祖母は笑いながら、

『男は剣難の方がまだ男らしいじゃないか、この児は色が白うて弱々しいからそれでうらないしや卜者から女難があると言われたのじや、けれども今から女難もあるまい、早くて十七八、遅くとも二十はたちごろから気をつけるがよい』と申しました。

ところが私にはその時（十二でした）もう女難があつたのでございませぬ。

ここまでお話したのでございますから、これから私の女難の二つ三つを懺悔ざんげいたしましょう。売卜者はうまく私の行く末を卜うらな

い当てたのでございます。

そのころ、私の家から三丁ばかり離れて飯塚という家がございましたがその娘におさよと申しまして十五ばかりの背せいのすらりとして可愛らしい児がいました。

その児が途みちで私を見るときつとうちに遊びに来いと言うのです。私も初めのうちは行きませんでしたがあまりたびたび言うので一度参りますると、一時間も二時間も止めて還かえさないで膝の上に抱き上げたり、頸くびにかじりついたり、頭の髪を丁寧かに搔き下してな、お可愛くなつたとその柔らかな頬ほおを無理に私の顔に押しつけたり、いろいろな真似をするのでございます。

そうすると私もそれが嬉れしいような気がして、その後はたび

たび遊びに出かけて、おさよの顔を見ないと物足りないようになり
ました。

そのうち、売卜者から女難のことを言われ、母からは女難とい
うことの講釈を聞かされましたので、子供心にも、もしか今の
女難ではあるまいかと、ひどくこわくなりましたが、母の前では
顔にも出さず、ないない心を痛めていながらも時々おさよのもと
に遊びに参りましたのでございます。

今から思いますと、やはりそのころ私はおさよを慕うていたに
違いないのです、おさよが私を抱いて赤あかんぼ児扱いにするのを私は
表面うわべで嫌がりながら内々はうれしく思い、その温たかな柔らかい
肌はだで押しつけられた時の心持は今でも忘れないのでございます。

女難といえばその時もう女難に罹^かつていたといつてもよろしゅうございましょう。

母は毎日のように、女はこわいものだという講釈をして聴かし、いろいろと昔の人のことや、城下の若い者の身の上などを例えに引いて話すのでございます。安^{あん}珍^{ちん}清^{きよ}姫^{ひめ}のことまで例えに引きました。外^げ面^{めん}如^に菩^ぼ薩^{ざつ} 内^{ない}心^{しん}如^に夜^よ叉^{やしや}などという文句は耳にたこのできるほど聞かされまして、なんでも若い女と見たら鬼^じか蛇^{じゃ}のようと思うがよい、親切らしいことを女が言うのは皆な欺^だますので、うかとその口に乗ろうものならすぐ大難に罹りますぞよというのが母の口癖でありましたのでございます。

私は母を信仰していましたから母の言うことは少しも疑いませ

んでした。それですからおさよも事によつたら内心如夜叉ではな
いかとこわがりながらも、自分で言いわけをこしらえて、おさよ
さんはまだ子供だし自分もまだ子供だからそんなこわいことはな
い、おさよさんが自分を可愛がるのは真実に可愛がるので決して
欺すだまのじゃあないとかういう風に考えていたのでございます。

ところがある日、日の暮に飯塚の家の前を通るとおさよが飛び
出して来て、私を無理に引っ張り込みました。そしてなぜこの四
五日遊びに来なかつたと聞きますから、風邪を引いたといひます
と、それは大変だ、もう癒なほつたかと、私の顔を覗きこんで、まだ
顔色がよくない、大事になさいよ修さんが病気になつたら私は死
んでしまふと言つてじつと私の眼を見るのでございます。私は気

が弱うございますからこういわれますとなんだかうれしいやら悲しいやらツイわれ知らず涙ぐみました、それを見ておさよは私を抱きかかえましたが見るとおさよも眼に一杯涙をもっているの
でございます。そして今夜は泊れおつかさんの代りに私が抱いて寝
てあげるからといいいます。おつかさんに叱られるからいやだと申
しますと、おつかさんには私が今往いつて謝ことわつて来るからかまわな
いといひます。その時私が、もし母上に言ったらなお叱られる、
おさよさんのところへ遊びに来るのも内証なんだからと小声で言い
ましたら、いきなり私を突き離して、なぜ内証で来るの、修さん
と私と遊んじやア悪いの、悪いのならもう来なくつてもようござ
んすよと、こわい顔をして私を睨にらみつけたのでございます。私は

慄^ふるい上つて縁がわから飛び下り、一目散に飯塚の家から駈け出しました。

それからというものは決して飯塚に参りません、おさよに逢つても逃げ出しました。おさよは私の逃げ出すのを見ていつもただ笑っていましたから、私はなおおさよが自分を欺しかけていたのだと信じたものでございます。

四

次の女難は私の十九の時でございます。この時はもう祖母^{ばば}も母も死んでしまい、私は叔母の家の^{やっかい}厄介になりながら、村の小学

校に出してもらって月五円の給料を受けていました。祖母の亡くなつたのは十五の春、母はその秋に亡くなりましたから私は急にみなしご孤児になつてしまい、ついに叔母の家に引き取られたのでございます。十八の年まで淋しい山里にいて学問という学問は何にもしないでただ城下の中学校に寄宿している従兄弟から送つて寄こす少年雑誌見たようなものを読み、その他は叔母の家に昔から在つた源平盛衰記、太平記、漢楚軍談、かんそくぐんだん忠義水滸伝ちゆうぎすいこてんのようなものばかり読んだのでございます。それですから小学校の教師さえも全くは覚束ないのですけれど、叔母の家が村の旧家で、その威光で無理に雇ってもらつたという次第でございました、母の病気の時、母はくれぐれも女に気をつけると、死ぬる間際まぎわまで女難を

戒しめ、どうか早く立身してくれ、草葉の蔭から祈っているぞと言つて死にました。けれどもどうして立身するか、それはまるで母にも見当がつかなかったのでございます。母は叔母の家から私の学資を出さそうとしたらしゆうございました。これが都合よく参りませんものですから、私の立身を堅く信じながらも、ただそれは漠^{ぼく}としたことで、実は内々ひどく心痛したものと見えます。それですから母としてはただ女難を戒しめるほかに私の立身の方法はなかつたのでございます。私はまたうまれつき意気地がないのかして、自分の立身のことにはどういふものかあまり気をかけませんでした。ただ母に急に別れたので、その当坐の悲しさ、一月二月は叔母の家においても、どうかすると人の見ぬところで、め

そめそ泣いておりました。

月日の経つうちに悲しみもだんだん薄らぎ、しまいには時々思
い出すぐらいのことで、叔母の親切にほだされ、いつしか叔母を
母のように思うて日を送るようになったのでございます。

十八の歳から、叔母の家を五丁ばかり離れた小学校に通つて、
同僚の三四人とともに村の子供の世話をして、夜は尺八の稽古に
浮身をやつし、この世を面白おかしく暮すようになりました。尺
八の稽古といえは、そのころ村に老としより人がおだいまして、自己流の尺
八を吹いていましたのを村の若い者が煽おだてて大先生のようにいい
ふらし、ついに私もその弟子分になったのでございます。けれど
も元大先生からして自己流ですから弟子も皆な自己流で、ただむ

やみと吹くばかり、そのうち手が慣れて来れば、やれ誰が巧いとか拙ますいとかてんでに評判をし合つて皆なで天狗てんぐになつたのでございます。私の性うまれつき質つぎでありましょうか、私だけは若い者の中でも別段に凝こり固まり、間まがな隙すきがな、尺八を手にして、それを吹いてさえいれば欲も得もなく、朝早く日の昇のぼらぬうちに裏の山に上がつて、岩に腰をかけて暁の霧を浴びながら吹いていますと、私の尺八の音でもつて朝霧が晴れ、私の転まろばす音につれて日がだんだん昇るようにまで思つたこともあつたのでございます。

それですから自然と若い者の中でも私が一番巧いということになり、老先生までがほんとに稽古すれば日本一の名人になるなどとそそのかしたものです。そのうち十九になりました。ちようど

春の初めのことでございます。日の暮方で、私はいつもの通り、尺八を持って村の小川の岸に腰をかけて、独り吹き澄ましていますと、後から『修蔵様』と呼ぶものがあります。振りかえって見ると武之允たけのじょうといいかめしい名を寺の和尚から附けてもらった男で隣村に越す坂の上に住んでいる若い者でした。

『なんだ。武之允やましろうのかみ山城守』

『全く修蔵様は尺八が巧いよ』とにやにや笑うのです。この男は少し変りもので、横着もので、随分人をひやかすような口ぶりをする奴ですから、『殴るぞ』と尺八を構えて喝おどす真似をしますと、彼きやつ奴急に真面目になりました、

『修蔵様に是非見てもらいたいものがあるんだが見てくれません

か』と妙なことを言い出したのでございます。変に思いまして、

『なんだろう、私に見てもらいたいというのは』

『なんでもいいから、ただ見てもらえばいいのだ』

『どんなものだい、品物かい』と問いますと武の奴、妙な笑いかたをして、

『あなたの大すきなものだ』

『手前はおれをなぶるなッ』

『なぶるのじゃアない、全く見てもらいたいのでござんす。私のお頼みだから是非見てやって下さい』と今度はまた大真面目に言うのでございます。

『よろしい、見てやろうから出せ』

『出せつて、今ここにはありません、ちよつと私の家へ来てもらいたいのでございますが』

『お家の宝、なんとかの剣という品物かな』と私がいいますと今度また妙に笑い出しまして、

『まずそんな物でございます、何しろ宝にや相違ないのだから、ウンそうだ、宝でございます』と手を拍うちますので私も不思議で堪りません、私の方からも見たくなりましたから、

『それじゃこれから一緒に行こう、サア行つて見てやろう』とそれから二人連れ立ちまして、武の家に参りました。

前に申しました通り武の家は小さな坂の頂にあるのでございませす。叔母の家からは七八丁もありましようか、その坂の下に例の

尺八の大先生が住んでいるのでございますから私も坂の下までは始終参りますが、坂に登ったことは三四度しかありません。この坂を越しますと狭い谷間でありまして、そこに家が十軒とはないのです。だからこの坂を越すものは村の者でもたくさんはないのでござります。武の家は一軒の母屋おもやと一軒の物置とありますが物置はいつも戸がしめき切つてあつてその上にがけ崖から大きなかし櫟の木がおつかぶさつていますから見るからして陰気なのでございます。母屋も広い割合には人気がないかと思われるばかり、シンとしているので。家にむかいあつたわだかま帷の下に四角の井戸の浅いのがありまして、いつも清水を湛えていました。総体の様子がどうも薄気味の悪いところで、私はこの坂に来て、武の家の前を通るたびに

すぐ水滸伝の麻痺薬しびれぐすりを思い出し、武松ぶしょうがやられました十字じゅうじ坡はなどを想い出したくらいです。

それですが、武から妙なことを言われて大いに不思議に思っている上に武の家に連れてゆかれますのですから、坂を上りながらも内々薄気味が悪くなって来たのです。途々、武に何を見せるのだと聞きましたが、武はどうしても言わないばかりか、しめたといい顔つきをして根性の悪い笑い方をするのでございました。

日はすっかり暮れて、十日ごろの月が鮮やかに映さしていました。が、坂の左右は樹しげが繁しげつていますから十分光が届かないのでございます。上りは二丁ほどしかありません、すぐ武の家の前に出ました。家の前は広くなって樹の影がないので月影はつきりと地に

印していました。

障子に燈火あかりがぼんやり映つて、家の内はひっそりとしています。武は黙つて内庭に入りました。私は足が進みません、外でためらっていますと、

『お入りなされ！』と暗いところで武が言いました。

その声は低いけれども底力があつて、なんだか私を命令するようでした。

『ここで見てやるから持つて来い』と私は外から言いました。

『お入りなされと言うに！』と今度はなお強く言いましたので私も仕方がないから、のっそり内庭に入りました。私の入ったのを見て、武は上にあがり茶の間の次ぎに入りました。しばらく出て

参りません、その様子が内の誰かところこそ話をしているようでした。間もなく出て参りまして、今度は優しく、

『お上りなされませ、汚ないけえども』といえますから少しは安心して上りました。そして武の案内で奥の一間に入りますと、ここは案外小奇麗になっていまして、行あんどん燈の火が小さくして部屋の隅に置いてありました。しかしまず私の目につきましたのはそこに一人の娘が坐っていることでございます。私が入ると娘は急に起とうとしてまた居住いを直して顔を横に向けました。私は変ですから坐ることもできません、すると武が出し抜けに、

『見てもらいたいと言ったのはこれでございます』というや女は突つ伏してしまいました。私はなんと行ってよいか、文句が出ま

せん、あつけに取られて武の顔を見ると、武も少し顔を赤らめて
言いにくそうにしてみました、

『まあここへ坐つて下さりませ、私はちよつと出て来ますから』
と言ひ捨てて行こうとしますから、

『なんだ、なんだ、私はいやだ、一人残るのは』と思わず言いま
すと、

『それでは坐つて下さらんのか』と言つてこわい顔をして私を睨
みました。私が帰るといえばすぐにでも蹶けと飛ばしそうな劍幕です
から私も仕方なしにそこに坐つて黙つていますと、娘は泣いてお
るのです。嗚咽むせびかえつています、それを見た武の顔はほん
とうに例えようがありません、額に青筋を立てて齒を喰いしぼる

かと思うと、泣き出しそうな顔をして眼をまじまじさせます。何か言い出しそうにしては口のあたりを手の甲で摩こするのでございます。

『一体どうしたのだ』と私も事の様子があんまり妙なので問いかけました。しますると武がどもりながらこういうのでございます。妹が是非あなたに遇わしてくれと言つて聞かない、いろいろ言い聞かしたがどうしても承知しない、それだからあなたを欺だまして連れて来たのだ、どうか不憫ふびんな女だと思つて可愛がつてやってくれ、私から手を突いて頼むから、とまずこういう次第なのです。馬鹿馬鹿しい話だとお笑いもございましょうが、全くそうでしたので、まず私が村の色男になつたのでございます。

そのころ私は女難の戒めをまるで忘れたのではありませんが、何を申すにも山里のことですから、若い者が二三人集まればすぐ娘の評判でございます。小学校の同僚もなんぞと言えばどこの娘は別嬪べっぴんだとか、あの娘にはもう色があるとか、そんな噂うわさをするのは平気で、全くそれが一つの楽しみなのですから、私もいつかその風に染みまして村の娘にからかつて見たい気も時々起したの
でございます。さすが母の戒めがありますから、うかとは手も出
しませんでしたが、決して心からその実、女を恐れていたのでは
なく、もしよい機会おきがあつたらきつと色の一つぐらいできるはず
になつていたのでございます。

ところで武の妹はお幸こうと申しまして若い者のうちで大評判な可

愛い娘でございまして年はそのころ十七でした。私も始終顔を見知っていましたと言葉を交^かわしたことはなかつたのです。先方^{むこう}では私が叔母の家の者であり、学校の先生ということで遇うたびに礼をして行き過ぎるのでございませう、田舎の娘に似^{にや}わらない色の白、眼のはつきりとした女で、身体つきよくおさよに似てすらりとしていました。城下の娘にもあのくらいなのは少ないなどと村の者が自慢そうに評判していたのですが全くそうだと私も遇うたびに思っていたのでございませう。でありますから、私も眼の前にお幸を突きつけられて、その兄から代^くって口説^{くど}かれましては女難なぞを思うことができなかつたのです。それに気の弱い私ですから、よしんば危いことと気がつきましたところで、とてもあの場

合、武とお幸を振りきって逃げて帰るといふような思いきつた所作は私にはできないのでございました。

その後は私も二晩置きか三晩置きには必ずお幸のもとに通いましたが、ごく内証にしていましてから、誰も気がつきませんでした。それに兄の武之允が何かにつけてかばってくれますし、また武の女房も初めからよく事情わけを知っていて、やはり武と同じようにお幸と私の仲をうまくゆくようにのみ骨を折ってくれましたので私も武の家ではおおびらで遊んだものでございます。

二人の仲は武の夫婦から時々冷かされるほど好うございました。かれこれするうち二月三月も経ち、忘れもしません六月七日の晩のことです。夜の八時ごろ、私はいつものようにお幸のもとに参

りますと、この晩は宵よいから天そら気模様が怪しかつたのが十時ごろには降りだして参りました。大降りにならぬうち、帰ろうと言ひ出しますと、お幸と武の女房が止めて帰しません、武は不在るすでございましたが、今に帰るだろうから帰ったら橋まで送らすからと申しますのでしばらくぐずぐずしてきますと、武が帰つて参りました。どこで飲んだかだいぶ酔つていましたが、私が奥の部屋に臥ね転ころんでいると、そこへずかずか入つて来まして、どつかり大あくらをかきました。お幸は私の傍そばに坐つていたのでございます。

『そとは大変な降りでござりませぬ、今夜はお泊りなされませ』と武は妙に言ひだしました、と申すのは私がこれまで泊ろうとしても武は、もし泊まつて事が知れたらまずいからといつも私を宥なだ

めて帰りましたので、私も決して泊ったことはなかったのです。

『イヤやはり泊らん方がよかろう』と私の言いますのを、打ち消すようにして武は、

『実は今夜少しばかり話がありますから、それでお泊りなされと
いうのだから、お泊りなされというたらお泊りなされ』と語気ことばが
やや暴あらうなつて参りました。舌も少し廻りかねる体ていでございま
した。

『話があるツてなんだろう、今すぐ聞いてもいいじやアないか』
『あなた気がついていますか』と出し抜けに聞かれました。

『何をサ?』私は判じかねたのでございます。

『だからあなたはいけません、お幸はこれになりましたぜ』と腹

に手を当てて見せましたので私はびっくりしてしまったのでございます。お幸は起つて茶の間に逃げました。

『ほんとかえ、それは』と思わず声を小さくしました。

『ほんとかつて、あなたがそれを知らんということはない、だけれども知らなかつたらそれまでの話です、もうあなたも知つてみればこの後の方法かたをつけんじやア』

『どうすればええだろう?』と私は気が顛倒てんとうしていますから言うことがおずおずしています、そうしますと武はこわい眼をして、『今になつてそれを聞く法がありますか、初めからわかりきつているじやありませんか、あなたの方でもこうなればこうと覚悟があるはずじや』

言われて見ればもつともな次第ですが、全く私にはなんの覚悟もなかったので、ただ夢中になってお幸のもとに通つたばかりですから、かように武から言われると文句が出ないのです。

私の黙っているのを見て、武はいまいましそうに舌打ちしました、
たが、

『すぐ公おもてむき 然の女房になされ』

『女房に？』

『いやでござりますか？』

『いやじゃないが、今すぐと言うたところで叔母が承知するかせんかわからんじやないか』

『叔母さんがなんといおうとあなたがその気ならなんでもない、

あなたさえウンと言えば私が明日あしたにでも表向きの夫婦にして見せます。なにもここばかりが世界じゃないから、叔母さんや村の者がぐずぐず言やア二人でどこへでも出てゆけばいい、人間一匹何をしても飯は喰えますぞ！』とまで云われて私も急に力が着きましたから、

『よろしい、それではともかくも一応叔母と相談して、叔母が承知すればよし、故障を言えばお前のいう通り、お幸と二人で大阪へでも東京へでも飛び出すばかりだが、お幸はこれを承知だろうか』

『ヘン！ そんなことを私に聞くがものはありませんじゃないか、あなたの行くところならたとい火の中、水の底と来ませア！』と

指の尖さきで私の頬を突いて先の劍幕にも似ず上気嫌なんです。

その晩はそれで帰りましたが、サアこの話がどうしても叔母に言い出されないのでございます。それと申すのは叔母も私の母より女難の一件を聞いていますし、母の死ぬる前にも叔母に女難のことは繰り返して頼んでおいたのですから、私の口からお幸のことでも言い出そうものならどんなに驚きもし、心配もするかわからないのでございます、次の朝から三日の間、私は今言おうか、もう切り出そうかと叔母の部屋を出たり入ったりしましたが、とうとう言うことができなかつたのでございます。

叔母に言うことができないとすれば、お幸と二人で土地を逃げる他に仕方がないと一度は逃かけおち亡の仕度をして武の家に出かけま

したが、それもイザとなつて踏み出すことができませんでした。と申すのは、『これが女難だな』という恐ろしい考えが、次第次第にたかまつてきて、今までお幸のもとに通つたことを思うと『しまった』という念が湧わき上るのでございます。それですからもし、お幸を連れて逃げでもすれば、行く先どんな苦勞をするかも知れず、それこそ女難のどん底に落ちてしまうと、一念こうなりましてはかけおちもできなくなつたのでございます。

それで四苦八苦、考えに考えぬいた末が、一人で土地を逃げるという了見になりました、忘れもいたしません、六月十五日の夜、七日の晩から七日目の晩でございませう、お幸に一目逢いたいという未練は山々でしたが、ここが大事の場合だと、母の法名を念仏

のように唱えまして、暗やみに乗じて山里を逃亡いたしました、その晩あたりは何も知らないお幸が私の来るのを待ち焦こがれていたのに違いありません。女に欺されてはならぬとばかり教えられた私がいつか罪もない女を欺すこととなり、女難を免のがれるつもりで女を捨てた時はもう大女難にかかっていたので、その時の私にはそれがわからなかつたのでございます。

叔母の家から持ち出した金はわずか十円でございますから東京へ着きますと間もなく尺八を吹いて人の門に立たなければならぬ次第となりましたのです。それから二十八の年まで足かけ十年の間のことは申し上げますまい。国とは音信不通、東京にはもちろん、親族もなければ古い朋友もないので、種々さまざまのことを

やって参りましたが、いつも女のことです大事の場合をしくじつてしまいました。二十八になるまでには公^{おもてむき}然の妻も一度は持ちましたが半年も続かず、女の方から逃げてしまいました。しかしその妻も私が本郷に下宿しておるうちにその娘とできやったのでございます。

二十八の時の女難が私の生涯の終りで、女難と一しよに目を亡くしてしまったのでございますから、それをお話しいたして長物語を切り上げることにいたします。

五

二十八の夏でございました、そのころはやや運が向いて参りまして、鉄道局の雇いとなり月給十八円貰もらつていました。が女には懲こりていますから女房も持たず、婆さんも雇わず、一人で六畳と三畳の長屋を借りまして自炊しながら局に通つておつたのでござい
ます。

すまい 住居は愛宕あたご下町したまちの狭い路次で、両側に長屋が立っています。中のその一軒でした。長屋は両側とも六軒ずつ仕切つてありました。が、私の住んでいたのは一番奥で、すぐ前には大工の夫婦者が住んでいたのでございます。

長屋の者は大通りに住む方かたとは違ひまして、御承知ごぞんじでもござい
ましようが、互いに親しむのが早いもので、私が十二軒の奥に移

りますと間もなく、十二軒の人は皆な私に挨拶するようになりま
した。

その中でも前に住む大工は年ごろが私と同じですし、朝出かけ
る時と、晩帰える時とが大概同じでございますから始終顔を合わ
せますのでいつか懇意になり、しまいには大工の方からたびたび
遊びに来るようになりました。

大工は名を藤吉と申しましたが、やはり江戸の職人という気風
がどこまでもついて廻わり、様子がいなせで弁舌が爽やかさわで至極
面白い男でございました。ただ容貌きりようはあまり立派ではございませ
ん、鼻の丸い額の狭いなどはことに目につきました。笑う時はど
こかに人のよい、悪く言えば少し抜けているようなところが見え

て、それがまたこの人の愛嬌でございます。

私のところへ夜遊びに来ると、きつと酒の香をにおいぶんぶんさせて、いきなり尻をまくつてあぐらをかきます。そして私が酒を呑まぬのを冷やかしたものでございます。

そしてまた、しきりと女房を持てとすすめました。そのついでにどうかいたしますと、『君なぞは女で苦勞したこともない唐とうへ偏木んぼくだから女のありがた味を知らないのだ』とやるのです。御本人はどうかと申しますと、あまり苦勞をしたらしくもないので、その女房も、親方が世話をして持たしてくれただかいうのでございませう。

けれども私は東京に出てから十年の間、いろいろな苦勞をした

に似ず、やはり持つて生まれた性質しやうぶんと見えまして、烈しいこともできず、烈しい言葉すらあまり使わず、見たところ女などには近よることもできない野暮天に見えますので、大工の藤吉が唐偏木で女の味も知らぬというのは決して無理ではなかったのです。實際私は意気で女難にかかったというよりか皆んな、おとなしくつて野暮だからかえつて女難にかかったのでございます。

ある夜のことに藤吉が参りまして、洗濯物せんたくものがあるなら鼻かかあに洗せんたくわせるから出せと申しますから、遠慮なく単衣ひとえと襦じゆばん袢ばんを出しました。そう致しますとそのあくる日の夕方に大工の女房が自分で洗濯物を持つて参りまして、これだからお神さんを早くお持ちなさい、女房のありがた味はこれでもわかるうと私の膝の上に持つ

て来たのを投げ出して帰りました。この女はお俊しゅんと申しまして、年は二十四五でございます。長屋中でお俊はいつか噂うわさにのぼり、またお俊の前でもお神さんはどう見ても意気いけだなぞと、賞ほめそやす山の神があるくらいですから私の目にもこれはただの女ではないくらいのことは感かんづいていたのでございます。

藤吉は毎晩のように来るようになりました。それは一ツは私から尺八を習おうという熱心であつたでございしますが、笛とか尺八とかいうものは性うまれつき質しつと見えまして藤吉は器用な男でありながらどうしても進歩いたしません。それでも屈せずブウブウ吹いていたのでございます。

お俊も遊びに来るようになりました。初めは二人で押しかけて

参りましたが後には日曜日など、藤吉のいない時は昼間でも一人で遊びに来て、一人でしゃべって帰ってゆくようになったのでございませう。私も後には藤吉の家に出掛けて夜の十二時までもくだらん話をして遊ぶようになりました。お俊はしきりに私の世話を焼いて、飯まで炊いてくれることもあり、菜ができると持って来てくれる、私の役所から帰らぬうちにちゃんと晩の仕度をしてくれることもあり、それですから藤吉がある時冷かしまして、『お前はこのごろ亭主が二人できたから忙がしいなア』と言ったことがあります。けれども藤吉は決して私を疑ぐるようなことはなく、初めはただ隣りづきあいでしたのが後には、なんでも身の上のことを打ち明けて私に相談するようになりました。それですから私

もそのつもりでつきあつて、随分やつ力にもなつてやり、時には金の用までたしてやりましたのでやつはなお私をまたない友と信じ、二日ばかり私が風邪をひいた時など一日は仕事を休んで私のそばに附いていたことさえござります。

それに長屋中、皆な私を可愛がつてくれまして、おとなしい方だよい方だ、珍しい堅かたじん人だと褒ほめてくれるのでござります。ですからお俊ばかりでなくお神さんたちが頼みもせぬ用を達たしてくれるのでございます。ところがおかしいのはお俊がこれを焼いて、何を私がついていけるによけいなお世話だと、お神さんたちの目の前でいやな顔をする、それをお神さんたちはなお面白半分に私の世話を焼いたこともありましたが、けれども、それでもつてお俊と

私の仲を長屋の者が疑ぐるかというに決してそうでなく、てんで私をば木か金で作ったもののように無類の堅人だと信じていたのでございます。けれどもお俊の方はそれほどの信用はないのです。ですからお俊さんは少し怪しいが、とても物にはならぬなど、明らかさまに私に向つて言つた山の神さえいたのでございます。

実際、お俊は怪しいと言われても仕方がありますまい。ある晩のことに私が床を延べていますと、お俊が飛んで参りまして、『どうせ私じゃお氣に入りませんよ』と言わざま布団ふとんを引つたくつて自分でどんどん敷き『サア、旦那様お休みなさい、オー世話の焼ける亭主だ』と言いなながら色気のある眼元でじつと私を見上げましたことなどは、ただの仕草ではなかつたのでございます。

そしてその時の私の心持を言いますと、決して長屋の者が信じていたほどの堅固なものでなかつたので、木や石でない限り、やはり妙な心持がしたのでございます。

私がある時藤吉に向い、『どうもお俊さんは意気だ、まるで素人じゃアないようだ』と申しますと、藤吉にやにや笑つていました。『うまいところを当てられた、実はあれはさる茶屋でかなり名を売った女中であつたのを親方が見つけ出し、本人の心持を聞いて見ると堅気の職人のところにゆきたいというので、それこそ幸いと私に世話してくれたのだ』と少々得意の気味でお俊の身元を打ち明けたのでございます。その時からなおさら私はお俊のそぶりを妙に感じて来ました。

けれどもまず平穩無事に日が経ちますうち、ちようど八月の中ごろの馬鹿に熱い日の晩でございます、長屋の者はみんな外に出て涼んでいましたが私だけは前の晩寝冷えをしたので身体の具合が悪く、宵から戸を閉めて床に就つきました。なんでも十時ごろまで外はがやがや話し声が聞えていました但那うちだんだん静かになりお俊もおとなしく内に引ひつ込んだらしかつたのです。私は眠あられないのと熱あつ苦しいとで、床を出ましてしばらく長火鉢の傍そばでマツチで煙草を喫すっていましたが、外へ出て見る気になり寝ね衣まきのままフイと路地に飛び出しました。路地にはもう誰もいないのです。路地から通りに出ますと、月が傾かいてちようど愛宕山の上にあるのでございます。外はさすがに少しは風があるのでそこ

からぶらぶら歩いていきますと、向うから一人の男が、何かぶつぶつ口小言を云いながらやって参ります、その様子が酔っぱらいらしいので私は道を避けていますとよろよろと私の前に来て顔を上げたのを見れば藤吉でございました。

藤吉は私を見るやいきなり、

『イヤ大将、うめえところで遇あつた、今これからお前さんとこへ、押しかけるとこなんだ。サア家へ帰れ、今夜こそおれは勘弁ならんのだ、どうしてもお前さんに聞いてもらうことがあるんだ』と私の手を取ってグイグイ路地の方へ引つ張つて参るのでございます。

私も酔っぱらいと思ひまして『よしよし、サア帰ろう、なんで

も聞こう』と一しよに連れ立って家に入りました。

藤吉の顔を見ると凄^{すこ}いほど蒼^{あお}ざめて眼^{まなこ}が坐^{すわ}っているのをごさいます。坐るが早いか、

『サア聞いてくれ、私はもうどうしても勘弁がならんのだ』と、それから巻舌で長々と述べ立てましたところを聞きますと、つまりこうなんです、藤吉がその日仲間の者四五人と一しよにある所^{ところ}で一杯やりますと、仲間の一人がなんかのはずみから藤吉と口論を初めました。互いに悪口雑^{ぞうごん}言をし合っていますうちに、相手の男が、親方のお古を頂戴してありがたがっているような意久地なしは黙って引つ込めと怒鳴ったものとみえます。それが藤吉にグツと癢^{しやく}に触りましたというものは、これまでに朋輩からお俊は

親方が手をつけて持て余したのを藤吉に押しつけたのだというあてこすりを二三度聞かされましたそうで、それを藤吉が人知れず苦しめていた矢先、またもやこういうて罵のしられたものですから言うに言われぬ不平が一度に破裂したのでございます、よけいなお世話だ、親方のお古ならどうした、手前てめえはお古を貰うことでもきまいと、我鳴りつけたものとみえます。そうすると相手はあざ笑って、お古ならまだいいが、新しいのだ、今でも月に二三度はお手がつくのだと悪あくたれたのでございます。藤吉はこれを聞きませんが早いか、『よし、見ている』とすぐそこを飛び出して家に帰るとお俊をたたき出してしまいう了見でぶらぶらと帰る途中、私に逢ったのでございました。

それでこれからすぐにお俊を追い出すつもりだがお前さんも同意だろうと申しますから私はお俊が元親方と怪しい関係のあつた女であるか、ないか、そんなことはわからないけれど、今ではお前を大切にして立派なお神さんになっているのだから追い出すほどのことはあるまい、見たところでも親方と怪しいという様子もないようだ、それは私が請け合ふと申しますと、藤吉『今でも怪しいなら打ち殺してやるのだ、以前の関係があると聞いただけで私は承知ができねえのだ、お俊を追い出して親方の横よこ面つらを張り擲なぐってくれるのだ、なんぞといえは女房まで世話をしてやったという、大きな面をしてむやみと親方風を吹かすからしてもう気に喰わねえでいたのだ、お古を押しつけておいて世話も何もあるも

のか、ふぎけるない！』私がいくらなだめても聴かないでとうとう宅うちに帰って参ったのでございます。

私もうつちやつてもおかれないと、藤吉の後について行こうとしますと、かまわないでおいでしてくれろと、私を内に入れません、仕方なしに外に立って内の様子を聴いていました。お俊はもう床に就ついていた様子でしたが、藤吉は引きずり起して怒鳴りつけているのでございます、お俊は何も言わないで聞いていたようですが、しばらくしますとパイと外へ出て参りました。私を見て、

『くだらないこと言ったらア、酔っぱらいに取り合っても仕方がないからうつちやつておきましょう』と言いながらズンズン私の宅うちに入るのでございます。私もお俊の後についてうちへ帰りまし

た。

『誰がくだらないことを焼たきつけたのだろうねえ、ほんとにしよ
うがないねえ』とお俊はこう言つて、長火鉢の横に坐つて、そこ
に置いてあつた煙草を吸うておるのです。

『明日の朝になればなんでもないサ』と私もしようことなしに宥なだ
めていましたが、お俊が帰りそうにもないので、

『静かになつたようだから見て来たらよかろう』と言いますと、
お俊は黙つて起つて出てゆきましたから、私はすぐ蚊帳かやの内に入
つてしまつたのでございます。ところが間もなくお俊は戻もどつて参
りまして、

『よく寝ているからそこから戸締りをして来ました』と澄まして

いるのです。

『そしてお前さんどうするのだ』と私は蚊帳の内から問いました。
『私はこうして朝まで寝ないでいてやるのサ』

『そんなことができるものか、帰って寝たがよかろう』と申しま
すとお俊はじれったそうに『うっちゃっておいて下さいよ、酔っ
ぱらいだから夜中にまたどんなことをするかわかるもんじやアな
い、私やこわいワ、』と平気で煙草を吸っているのです。私も言
いようがないから黙っていますと、お俊もいつものおしやべりに
似ず黙っているのでございます、蚊帳の中から透^{すか}して見ると、薄
暗い洋燈ランプの光が房ふさ々とした髪から横顔にかけてぼーツとしてい
ます、それに蒸し暑いのでダラリとした様子がいつにないなまめ

かしいように私は思ったのでございます。

そのうち、かれこれ二十分も経ちましたろうか。お俊は折り折り団扇うちわで蚊を追っていました。『オオひどい蚊だ』と急に立ち上がりました、蚊帳の傍そばに来て、『あなたもう寝たの？』と聞きました。

『もう寝かけているところだ』と私はなぜか寝ぼけ声を使いました。

『ちよつと入らして頂戴な、蚊で堪らないから』と言いさま、やつと一人寝の蚊帳の中に入って来たのでございます。

朝早くお俊は帰ってゆきましたが、どういふ風に藤吉の気嫌を取ったものか、それとも酔いが醒さめて藤吉が逆戻りしましたのか、

おとなしく仕事に出て参りました。出際に上り口から頭を出してでぎわ『お早よう』と言いさま、妙に笑って頭を搔かいて見せまして『いずれおわびは帰ってから』と、言い捨てて出て参りました。その後姿を見送って『アア悪いことをした』と私はギツクリ胸に来ましたけれどももう追いつきません。それからというものは、お俊の亭主はほんとうに二人になつたのでございます。

それから一月も経たぬうちに藤吉はまた親方に何か言われて、プンプン怒って帰って参りましたが、今度は少しも酔っていないのです。お俊と別れて自分はしばらく横浜へ稼かせぎに行くと言つた様子はひどく覚悟をしたらしいので、私も浜へゆくことは強いて止めません、お俊と別れるには及ぶまい、しばらく私が預かるか

ら半年も稼いだら帰って来てまた一しよになるがよかろうと申し
ますと、藤吉は涙を流してよろこびまして、万事よろしく頼むと
家を豊んでお俊を私の宅に同居させ、横浜へ出かけてしまいま
した。

もうこうなれば澄ましたもので、お俊と私はすっかり夫婦気取
りで暮していたのでございます。

そうすると一月ほどたちまして私は眼病にかかったのでござい
ます。たいしたこともあるまいと初めは医者にもかからず、役所
にはつとめて通っていました。だんだんに悪くなりましてしま
いには役所を休むようになりました。医者に見せますと容易なら
ぬ眼病だと言われて、それから急にできるだけの療治にかかりま

したが治る様子も見えないのでございます。

お俊はなかなか気をつけて看護してくれました。藤吉からは何たよりの消息もありません。私は藤吉のことを思いますと、ああ悪いことをしたと、つくづくわが身の罪を思うのでございますが、さればとてお俊を諭さとして藤吉の後を逐おわすことをいたすほどの決心は出ませんので、ただ悪い悪いと思いながらお俊の情を受けておりました。

そのうちだんだん眼が悪くなる一方で役所は一月以上も休んでいるし、私は気が気でならず、もし盲目めくらになったらという一念が起るたびに、悶もだえ苦しみました。

ここに怪しいことのございますのは、お俊の様子がひどく変つ

たことでもございます、なんとなく私を看護するそぶりが前のよう
でなく、つまらぬことにかんしやく疔癩を起して私につらく当るのでご
ざいます。そして折り折りは半日もいずれにか出あるいて帰らぬ
こともあるのです。私は口に出してこそ申しませんが、腹の中は
面白くなかつて堪りません。ところがある日のことでもございまし
た、『御免なさい』と太い声で尋ねて来た者があります。

『いらつしやい』とお俊は起つてゆきました、しばらく何かそ
の男とこそそ話をしていました、やがて私の枕元に参りまし
て、『頭領が見えました、何かあなたにお話ししたいことがある
そうです』

なんの頭領だろうと思つていますうちに、その男はずかずか私

の枕元に参りまして、

『お初はつにお目にかかります、私ことは大工助すけじろう次郎と申しますも
ので、藤吉初めお俊がこれまでいろいろお世話様になりましたに
つきましては、お礼の申し上げようもございません、別してお俊
が厚いお情をこうむりました儀につきましては藤吉に代りまして
私より十分の御礼を申し上げます。つきましては、お俊儀は今日
ただ今より私が世話することになりましたにつきましては早速お
宅を立ち退くことにいたします、さようあしからず御承知を願
置きます』と切り口上でベラベラとしゃべり立てました、私は文
句が出ないのでございます。

それからお俊と頭領がどたばた荷ごしらいをするようでしたが、

間もなくお俊が私の傍そばに参りまして、『いろいろわけがあるのだから、悪く思つちやアいけませんよ、さようなら、お大事に』

二人は出て行きました。私は泣くこともわめくこともできません、これは皆な罰だと思ひますと、母のやつれた姿や、孕はらんだまま置き去りにして来たお幸の姿などが眼の前に現われるのでございます。

役所は免やめられ、眼はとうとう片方が見えなくなり片方は少し見えても物の役には立たず、そのうち少しの貯たくわえ蓄はなくなつてしまいました。それから今の姿におちぶれたのでございますが、今ではこれを悲しいとも思いません、ただ自分で吹く尺八の音につれて恋いしい母のことを思い出しますと、いつそ死んでしまつ

たらと思うこともございませうが死ぬることもできないのでござい
ます」

*

*

*

盲人は去るにのぞんでさらに一曲を吹いた。自分はほとんどそ
の哀音悲調を聴くに堪えなかつた。恋の曲、懐旧の情、流転の哀
しみ、うたてやその底に永とこ久しえの恨みをこめていではないか。

月は西に落ち、盲人は去つた。翌日は彼の姿を鎌倉に見ざりし。

青空文庫情報

底本：「日本の文学」5 樋口一葉 徳富蘆花 国木田独歩」中
央公論社

1968（昭和43）年12月5日初版発行

初出：「文藝界」金港堂

1903（明治36）年12月

※「路次」と「路地」、「意久地」と「意気地」の混在は底本通り
にしました。

入力：iritanago

校正：多羅尾伴内

2004年7月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

女難

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>